

インド人の謎

拓
徹

なぜ、カレー
ばかり食べているのか？

インド滞在12年、
気鋭の著者によるインド入門の決定版！

インド人の謎

拓
徹

星海社

84



神秘、混沌、群衆……。インドには、とかく謎めいたイメージがつきまといまいます。こうしたイメージは、興味をかき立てるだけならまだしも、往々にしてわたしたち日本人とインドとのあいだの心理的な距離を拡げてしまいます。そこで、なにはともあれインドのこうした「謎のヴェール」をいったん剥ぎ取ってしまおう、というのが本書の趣旨です。

『地球の歩き方』から

では、もやもやとインドの上にかかるこの「謎のヴェール」とは、実際のところ、どんなものなのでしょうか。その大まかな一般形を探るために、次にウェブ版『地球の歩き方』インド旅行のページを参照してみたいと思います。このポピュラーな旅行ガイドは、インドについての解説を、次のように書き出しています。

「神々と信仰の国」または「喧騒と貧困の国」といわれるインド。五千年の歴史を誇り、多様な宗教、言語、文化を持つ民族がひしめき合って一つの文化圏を作っている。国内には膨大な数の遺跡があり、千年以上前に造られたものが当時の形のままに残っているものも少なくない。なかでもデカン高原の遺跡はインドを代表する人類の宝といわれ、その圧倒的なスケールには言葉を失ってしまうほど。また「人間の森」と喻えられるように、良くも悪くもさまざまな人々に会おうだろう。ドラマティックな旅ができることは間違いない。

（二〇一六年三月三〇日閲覧、数字表記を漢数字に変更）

インドが古今の遺跡群で満ちているのは事実です。また、『地球の歩き方』は旅行ガイドなわけですから、旅行者が興味を持つ遺跡・史跡について強調するのも自然なことです。ですが、「千年」「五千年」といった数字が強調されると、インドの「多様な宗教、言語、文化」までもがあたかも古代の遺跡群と同様、千年近くもその姿を変えずに存続しているかのような錯覚をもたらしてしまいます。また、右の引用文の中に言及はありませんが、インドの有名な「カースト制度」についても、それが古代から形を変えずに存続しているというふうに考える向きがあります。

つまり、ここにあるのは「悠久のインド」のイメージですが、このイメージは必ずしもインドの現実を反映しているわけではないのです。

本書の構成

インドが「謎のヴェール」に包まれている第一の理由はおそらく、それが桁外れの「悠久のインド」として異化されてしまっている点にあります。そこで本書ではまず、現在のインド社会（およびそこで見られるカースト制度や宗教）の基盤が、世界のさまざまな国や地域の場合と同様、近世や近代といった「近過去」に存在していることを示します（一、二意）。これを示すことによって、インドも他国同様、それなりに普通の国であることがお分かりいただけるのではないかと思います。

インドが異化される第二の理由はおそらく、右の『地球の歩き方』引用文に言及がある通り、その極端な「喧騒と貧困」にあります。これについても、インドの貧困は「悠久のインド」のカースト制度のせいだから、と突き放して遠くからインドを眺める姿勢をあらためる必要があるでしょう。本書では、インドの貧困の現場にできるだけ近づき、寄り添い、その現状と問題への対策を考えてみることによって、インドの「喧騒と貧困」にかか

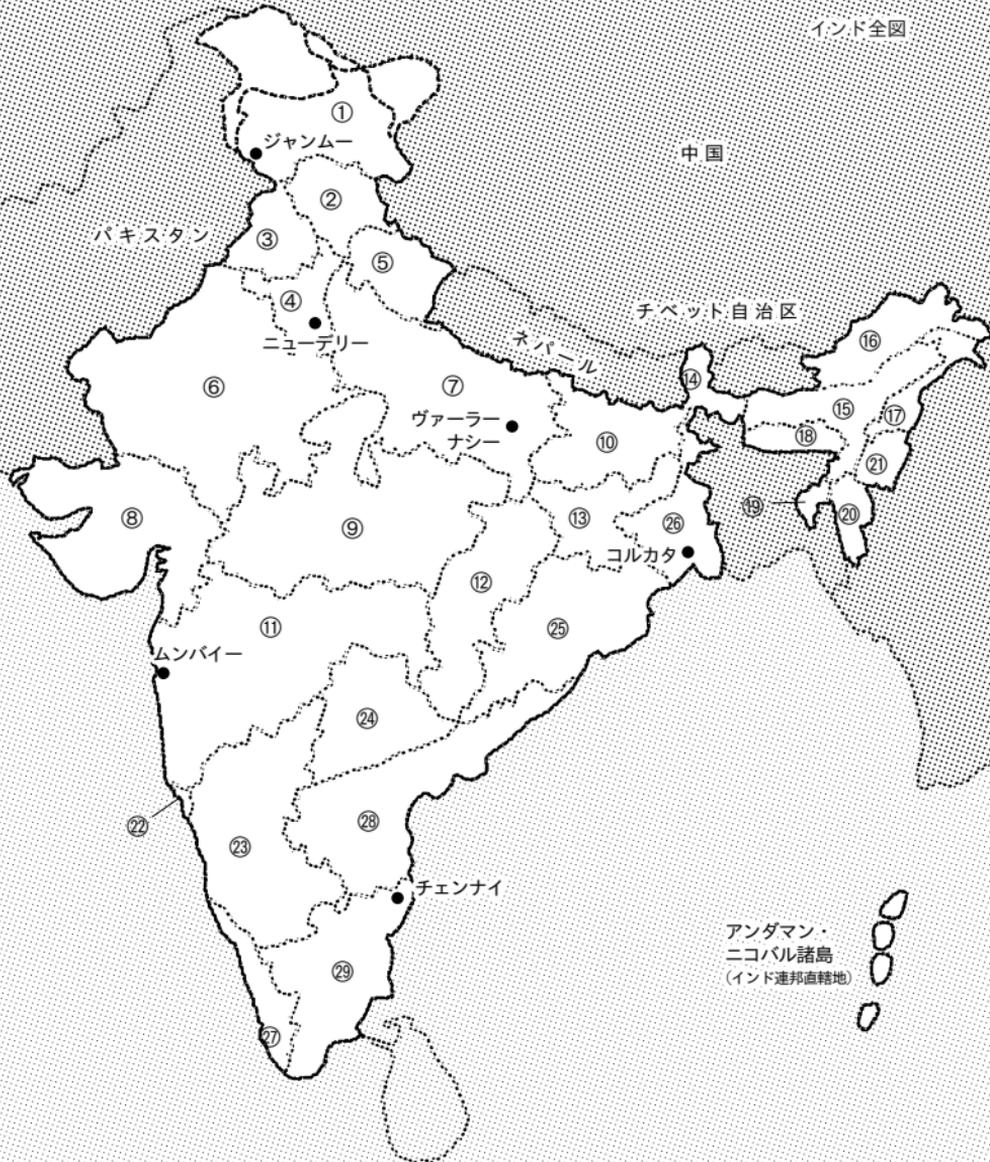
った「謎のヴェール」をとり払う努力をしてみたいと思います（三章）。

本書は専門書ではなく、あくまでも一般の日本人読者に、インドについてよりよく考えてもらうためのツールに過ぎません。本書は読者が自分の足でインドを訪れて観察することを奨励します。そのため、本書ではインドを訪れる日本人旅行者の多くが直面する、インドの観光地特有の状況についても解説します（四章）。グローバル化したインドの観光地には、特有の各種の「謎」が存在します。インドを旅行する人はインドが「大好きになるか大嫌いになるかのどちらか」だとよく言われますが、とくに「大嫌い」になった人、またはなりそうな人に読んでもらって、日本人がインドの観光地で味わういやな気持ちの原因をつきとめ、それを振り払ってほしいと願って書いたのが本章です。

このように、本書はインドから「謎のヴェール」を振り払う方向で叙述を進めて行きます。では、インドから「謎のヴェール」が振り落とされ、インドがわたしたちの前で普通の国の顔を見せはじめたら、インドの魅力は減ってしまうのでしょうか？ 答えは否です。偏見のない目でインドと向き合えば、インドのふつうの日常の中に、めくるめく魅力がひしめいているのが見えてくることでしょう。本書の最終章では、そんなインドの日常の中の面白さについて考えてみたいと思います。

なお、筆者の私が北インドのジャンムーという田舎町に留学していた事情から、本書の叙述は北インドが中心となっていることをお断りしておきたいと思えます。(ジャンムー・カシミール州では、藩王国時代の慣行を受け継いで夏・冬の季節によって州都が変わるのですが、冬季の州都がジャンムーです。)

ちなみに、私はそのジャンムーという町に約十二年間住んだのですが、そのあいだ何をしていたかという点、ジャンムーのすぐ北に位置するカシミール地方のいわゆる「カシミール紛争」の展開を、その歴史とともに追っていました。カシミールは独自の文化と歴史を持つ、イスラム教徒が中心の社会です。そのため私の専門は本書で叙述するような、ヒンドゥー教徒を中心とするインドからは少しずれるのですが、住んでいたジャンムーがヒンドゥー教徒主体の町だったこともあり、留学中はインド一般の文化や社会にも興味を抱きつつ日々を送っていました。だから本書は、私の研究活動というよりは、そんな日々の関心の産物です。



- | | | |
|------------------|-------------------|-----------------|
| ① ジャンムー・カシミール州 | ⑪ マハーラーシュトラ州 | ⑳ マニプル州 |
| ② ヒマーチャル・プラデーシュ州 | ⑫ チャッティースガル州 | ㉑ ゴア州 |
| ③ パンジャーブ州 | ⑬ ジャールカンド州 | ㉒ カルナータカ州 |
| ④ ハリヤーナー州 | ⑭ シッキム州 | ㉓ テラנגアーナ州 |
| ⑤ ウッタル・カンド州 | ⑮ アッサム州 | ㉔ オリッサ州 |
| ⑥ ラージスターン州 | ⑯ アルナーチャル・プラデーシュ州 | ㉕ 西ベンガル州 |
| ⑦ ウッタル・プラデーシュ州 | ⑰ ナガランド州 | ㉖ ケーララ州 |
| ⑧ グジャラート州 | ⑱ メガラヤ州 | ㉗ アーンドラ・プラデーシュ州 |
| ⑨ マディヤ・プラデーシュ州 | ㉀ トリプラ州 | ㉘ タミル・ナードゥ州 |
| ⑩ ビハール州 | ㉁ ミゾラム州 | |

はじめに 3

『地球の歩き方』から 3

本書の構成 5

序章

トイレからインドが見えてくる

21

意外と奥が深い？ インドのトイレ事情 22

なぜ、便座に泥が？ 23

インドでは「インド式」より「洋式」がエライ！ 25

「翼つき便器」登場！ 26

小便程度で水を流してはいけない!? 28

第1章

インドの近代とカースト制度の謎

31

1 なぜ、近世・近代が重要なのか？ 32

インドの地理 32

インド史のあらまし 35

近世・近代におけるインド社会の変貌 39

2 なぜ、街なかでカースト差別が見あたらぬのか？ 44

3 植民地時代に再定義されたカースト制度 46

ヴァルナ・ジャティ制 46

日本もカースト社会だった!? 48

植民地時代に再定義されたカースト制度 50

差別を助長したアーリヤ人種論 51

ジャーテイ意識の刷新 53

学問が定義した「伝統的」カースト制度 55

4 カースト差別は、どんなかたちで続いているのか？ 56

留保制度 57

就職におけるカーストの影響 59

インド政治におけるカースト 61

第2章 インドの宗教の謎 63

1 インドの多様な宗教 64

2 超訳 インドの宗教思想 66

ヴェーダの思想 66

輪廻と解脱 68

仏教とヒンドゥー教の違い 69

3 なぜ、あんなに多くの神様がいるのか？ 72

二人の思想家と人格神信仰 73

クリシュナ神 75

ラーム神 77

シヴァ神とその系統の神々 79

一風変わった神々 82

4 ヴァーラーナシーとヒンドゥー教の近代化 85

ヴァーラーナシーと「ヒンドゥー」意識の勃興 86

近代化と「ヒンドゥー教」意識の勃興 88

5 なぜ、神様がギンギラギンなのか？ 91

イギリス人の挫折 92

ギンギラギン様式の成立まで 93

神々の複製画は何をもたらしたのか 95

6 ヒンドゥー教はインド政治に影響を与えているのか？ 97

一九二〇年代における変化 98

ガンディーの複雑さ 100

ヒンドゥー・ナシヨナリズムとは何か 102

7 宗教は紛争とどう結びついているのか？ 106

対イスラム教徒の紛争 106

カシミール紛争 108

対スィク教徒、キリスト教徒の紛争 110

その他の紛争 111

8 なぜ、頭にターバンを巻いているのか？

113

ターバンの象徴性

113

スイク教徒とターバン

115

第3章 貧困とどう向き合うか

117

1 児童労働者のいる風景

118

安宿街のボーイたち

118

階級の壁

119

ひとまず距離を取ってみよう

121

2 なぜ、スラムのような場所があちこちにあるのか？

125

スラム街とボロ家集落 125

ジャンムーの労働者集落 127

3 なぜ、物乞いがあんなに多いのか？ 129

4 なぜ、NGOが立ち上がるのか？ 132

SBTとストリート・チルドレンの問題 133

コラム SBTの諸活動 136

距離を置くことで生まれる力 138

コラム SBTのシティ・ウォーク・ツアー 141

5 こうしてひろがる貧富の格差 143

テイー・ストール一家の事件 144

弁護士の話 146

大家は本当に悪玉なのか？ 147

第4章 手ごわいインドの観光地の謎

151

1 なぜ、タクシーは目的地に向かってくれないのか？

152

インドに着いた……とたんのトラブル

153

大丈夫、相手も普通の人間だ

154

インド旅行では、コミュニケーションが大切！

157

2 インドの安宿街って、どんなところ？

160

特殊なグローバル空間

161

2-1 外国人の目に、インドはどう映っているのか？

163

すれ違う意識

163

インドは「東洋的で神秘的」か？

164

2-2

インド人の目に、外国人はどう映っているのか？

167

外国人は皆「アングレーズ」

167

インド人にとっての安宿街

169

2-3

安宿街には、いろいろなインド人がいる

171

ネガティブなインド人の問題

171

ポジティブなインド人の素晴らしさ

173

3

なぜ、イスラエル人旅行者が多いのか？

176

インドを訪れる外国人って、どんな人たち？

176

イスラエル人旅行者とクツル〜マナーリー

178

観光客は収入源、とはいえ……

181

4

なぜ、インド人男性と日本人女性はひかれあうのか？

183

イムラーン君のトラブル

183

インド人にとっての結婚

187

第5章 食・動物・音楽 —— インドの楽しい謎

195

1 なぜ、インドで食中毒を起こすのか？

196

インドの食は家であり

197

安食堂が「食えない」ワケ

198

2 なぜ、インドでは家庭料理が充実しているのか？

201

インド料理の神髄は家庭にあり

201

女性と料理

202

家庭料理は即興芸術

204

コラム 列車でのコミュニケーション

206

3 なぜ、カレーばかり食べているのか？ 209

4 なぜ、インド人は数学ができるのか？ 212

ヴェーダ数学の虚実 212

インドIT産業を支えているのは何か？ 215

5 なぜ、町に動物があふれているのか？ 218

6 なぜ、野良犬がわがもの顔で歩いているのか？ 222

インド社会と野良犬たち 222

野良犬たちとインドの自由 226

7 牛の気配、人の気配 229

8 なぜ、インドの古典音楽はこんなに独特なのか？ 233

インドの古典音楽 233

私の個人的体験 234

独特の「スワラ」と抽象性 237

9 映画や音楽は、インド人の人生とどうかかわっているのか？ 241

娯楽映画を観るのは誰？ 241

奥が深い歌Ⅱ詩 243

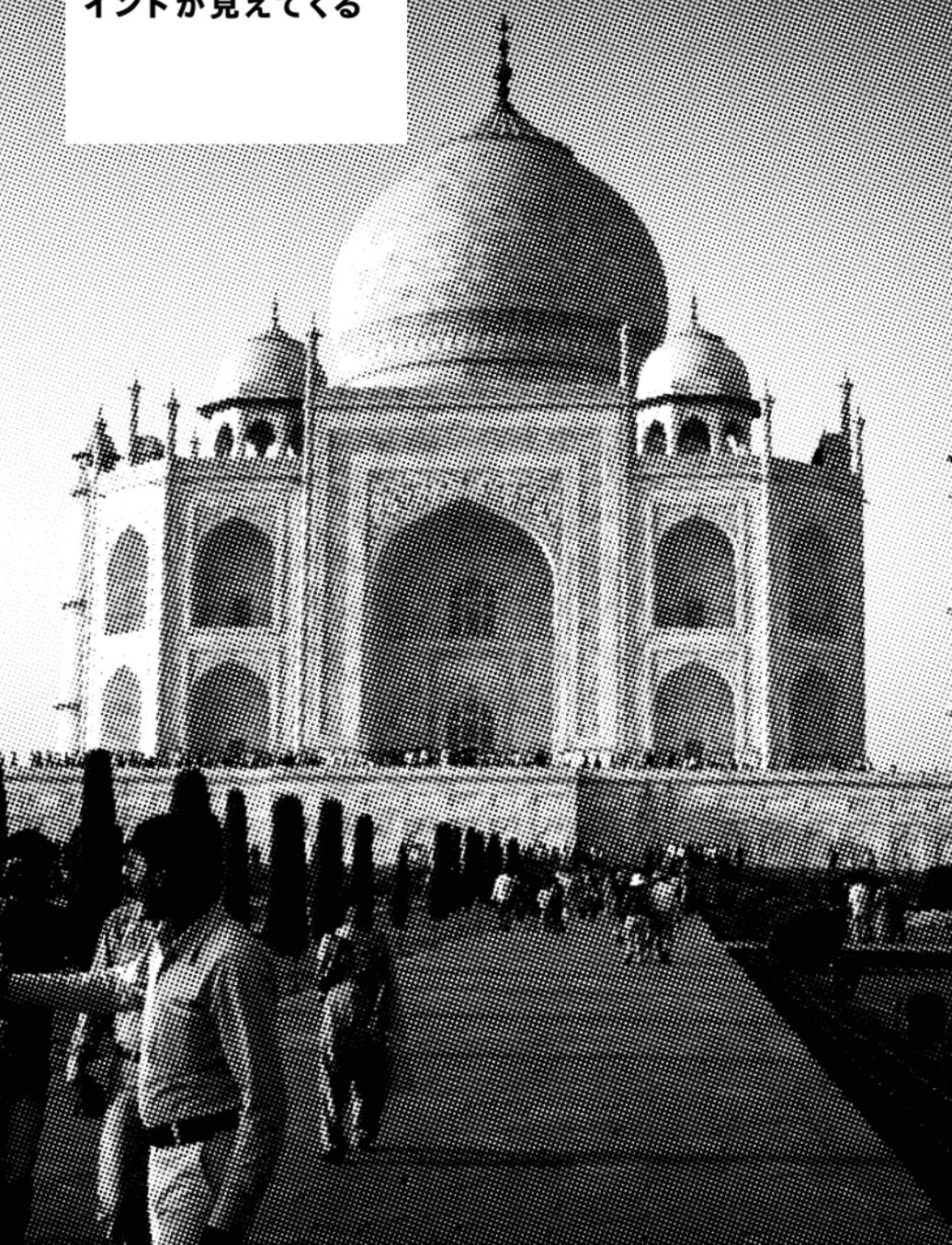
インド人の人生と映画・音楽・詩 245

おわりに 249

主な参考文献 251

序 章

トイレから
インドが見えてくる



意外と奥が深い？ インドのトイレ事情

遠い国の事情を想像するのは、なかなか難しいものです。

インドといえば、摩訶不思議でわけのわからない国というイメージがありますが、いざ実際に旅行するととなると、すべて「わけがわからない」で済ますわけにも行きません。そこでわたしたちは事あるごとに勝手な理屈をひねり出して、つじつまを合わせようとしています。

私が初めてインドを旅したとき、一番「わからない」と思ったのがトイレの汚さでした。とくに洋式トイレの便座が泥まみれのことが多く、とても座って用を足す気になれませんでした。

インド人が一般的にトイレトーパーを使わず水で用を足す、つまり手にすくった水で「手動ウォッシュレット」を行うことは知っていましたが、そのために便座がどうしてこんなに汚れるのか。

本当にわけがわからず、そのときはつい「インドは汚いところだ」とつじつまを合わせてしまいました。

じつは、この便座の汚れにはちゃんと理由があります。そればかりか、その背景にはインドならではの歴史や思考法が横たわっています。

食事の方には申し訳ありませんが、この本はとりあえず、そんなインドのトイレ事情から話をはじめてみたいと思います。インドを旅行中、かならずお世話になるトイレには、日本文化とはずいぶん異なるインド文化の特徴が、ぎゅっと濃縮されて詰め込まれているからです。

では、ウエルカム・トウ・インディア！

なぜ、便座に泥が？

インドのトイレは、なにがそんなに日本のトイレと違うのか。

謎の糸口は洋式トイレの便座の汚れです。なぜか泥まみれのインドの便座。

その理由は単純です。インド人はふつう、洋式トイレの便座に直接腰かけることはしません。ではどうするかというと、便座を靴で踏みつけ、よいしょと便器の上にあがり、バランズを取ったうえでしゃがみ込みます。つまり、和式トイレでわたしたち日本人がしゃがんでとる「ウンチング・ポーズ」を、インド人は洋式トイレの便座の上でとるのです。

U字形の便座の上で立ったりしゃがんだりするのは、なんだかすべり落ちそうで落ち着かない気がします。インド人は慣れたものです。

そんなわけで、インドの洋式トイレの便座は靴底の泥で汚れているのです。

それではなぜ、インド人は洋式トイレをこんなふうにするのでしょうか。

この理由も単純です。インド人にはしゃがんで用を足す習慣があるのです。明け方、川べりや野原でしゃがむ人々というのは、インドではよく見かける光景です。

このため、インド本来のトイレは日本の和式と同じで、「ウンチング・ポーズ」で用を足すべく作られています。おおざっぱに言えば、日本の和式便器から「金隠し」を取り去ったのが本来のインド式便器です。

そして理由もなく習慣を変えるのが苦手なインド人は、洋式トイレに対しても習慣を変えようとはしません。便座にべったり肌が触れるのはイヤ、という感覚もあるでしょう。こうした事情から「便座の上でウンチング・ポーズ」という独特の現象が起きるのです。

インドでは「インド式」より「洋式」がエライ!

問題は、そこまでウンチング・ポーズにこだわるのなら、はじめからインド式トイレを設置すればよさそうなものなのに、なぜわざわざ使いづらい洋式を設置するのかという点にあります。そしてまさにこの点にこそ、日本と異なる、インド独特の歴史と思考法が潜んでいるのです。

この疑問に対する答えを一言でいえば、インド人の感覚では洋式の方がインド式より地位が上なので、洋式がふさわしい場所にはそれを設置せざるをえないから、ということになります。

この背景にあるのが、インド近代の歴史、つまり、インド亜大陸における長いイギリス支配の歴史です。インドではたとえば、読み書き・教育において今も英語が尊重されます。よりフォーマル、より上流志向のパーティーなどで交わされる会話もほぼ英語に限られます。

これと同じで、ある程度以上のステータスを自任するレストランやホテルのトイレは洋式でなければならないのです。私が留学したインド地方大学の学生寮でも、修士用の寮にはインド式トイレが、博士用の寮には洋式トイレが設置され、暗黙の格づけが行われてい

ました。

このほか、外国人がひんばんに訪れる施設や場所には、ふつう洋式が設置されます。

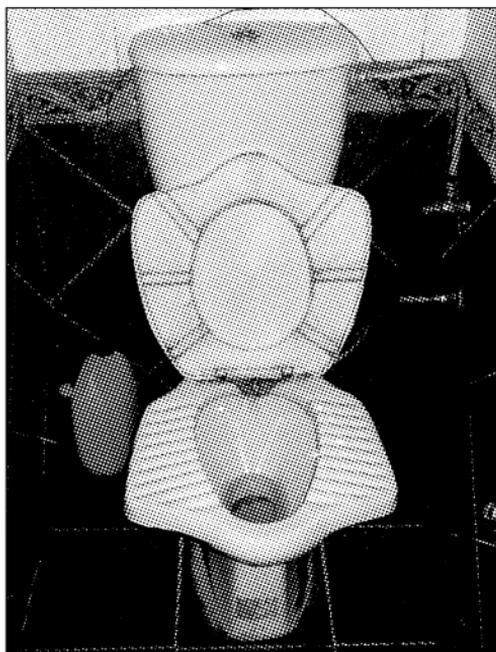
「翼つき便器」登場！

とはいえ、使いにくいものは使いにくい。

どんなに英語が達者なインド人でも、友人や恋人と気のおけない時間を過ごすとき、口から自然にこぼれるのはたいいてい英語ではなく、ヒンディー語をはじめとするインドの地域言語です。これと同じで、ほとんどのインド人は、地位やステイタスを気にしつつ、やっぱりトイレはしゃがみやすいインド式が落ち着くな、と心の中で思っているのです。

そこで登場したのが第三の便器、すなわち右下写真の「翼つき便器」です。

これは洋式の便座部分をひろげ、上に乗ってしゃがみやすく改良したもので、まさにインド式と洋式の折衷。正式名称はズバリ「アングロ・インディアン」(英国Ⅱインド式)トイレ



翼つき便器

レットです。ステイタスを考慮すれば洋式、しかし快適さを追求すればインド式……というインド人のジレンマを解決すべく生まれた一品ですが、やや不格好なためか、それほど普及していません。しかるべき場所で、ときおり目にする、という程度です。ちなみにこの写真は、私が住んでいた地方都市ジャンムーの、やや高級なファーストフード店のお手洗いで撮影しました。

しかしこの翼つき便器、考えてみれば奇妙な代物です。わたしたち日本人の目にはほとんどナンセンスに映るのですが、その背景にはインド人の大まじめなステイタス意識、イギリス文化に対する複雑な感覚、自らの慣習をめぐる独特の頑固さなどが混在しています。また、そこにはインドならではの、他集団や異文化に対する拒否と寛容のせめぎあいが見ええます。

くりかえし民族混交や植民地化を経験したインド人の異文化感覚は、歴史的にそういう経験のほとんどない日本人にとって、なかなかわかりにくいものです。第四章で詳述するように、こうしたインド人の異文化観は、彼らと外国人旅行者の間のトラブルの一因ともなります。

小便程度で水を流してはいけない!?

この他、インドのお手洗いで誤解を招きやすいのが、インド人の多くがトイレで節水に努めているという事情です。結果的に「大」の後でも流さずそのままにしてあったりするので、慣れない日本人はトイレに入ってギョツとすることになります。

この現象は、なにもインド人の不潔好みのせいではなく、単にインドでは水の供給が充分でないという事情に由来しています。このため、水道水の供給が比較的安定した都市の住宅街でも、家庭によっては、小便程度で水を流してはいけないと子供をしつける親もあるほどです。

ちなみにインドでも、足腰の悪い高齢者などが洋式トイレを「本来の」用法で使用する例が増えています。インド都市部の大家族用住宅にはふつう複数のトイレが設置されていて、そのうちの一つはたいいてい洋式なのですが、これが半ばそうした高齢者の専用となっているわけです。

また、中産階級以上の住宅に洋式が設置されている場合、そのトイレはたいいてい「本来

の」用法で使用されています。使用者が家族などに限られる場合、トイレに対する彼らの対応も変わってくるようです。

そこはインド、トイレ事情もつぶさに見ればじつに多様で、今日の都市部では少なからぬインド人がトイレットペーパーを使っているほどです。

田舎のトイレ事情

トイレ談義のしめくくりには、インド農村部のトイレ事情についても少し触れておきましょう。

「明け方に川べりや野原でしゃがむ人々」についてはすでに言及しましたが、インドでこうした「野糞」が一般的な背景には、いまだにインド農村部の約七割の家にトイレがないという事情があります。

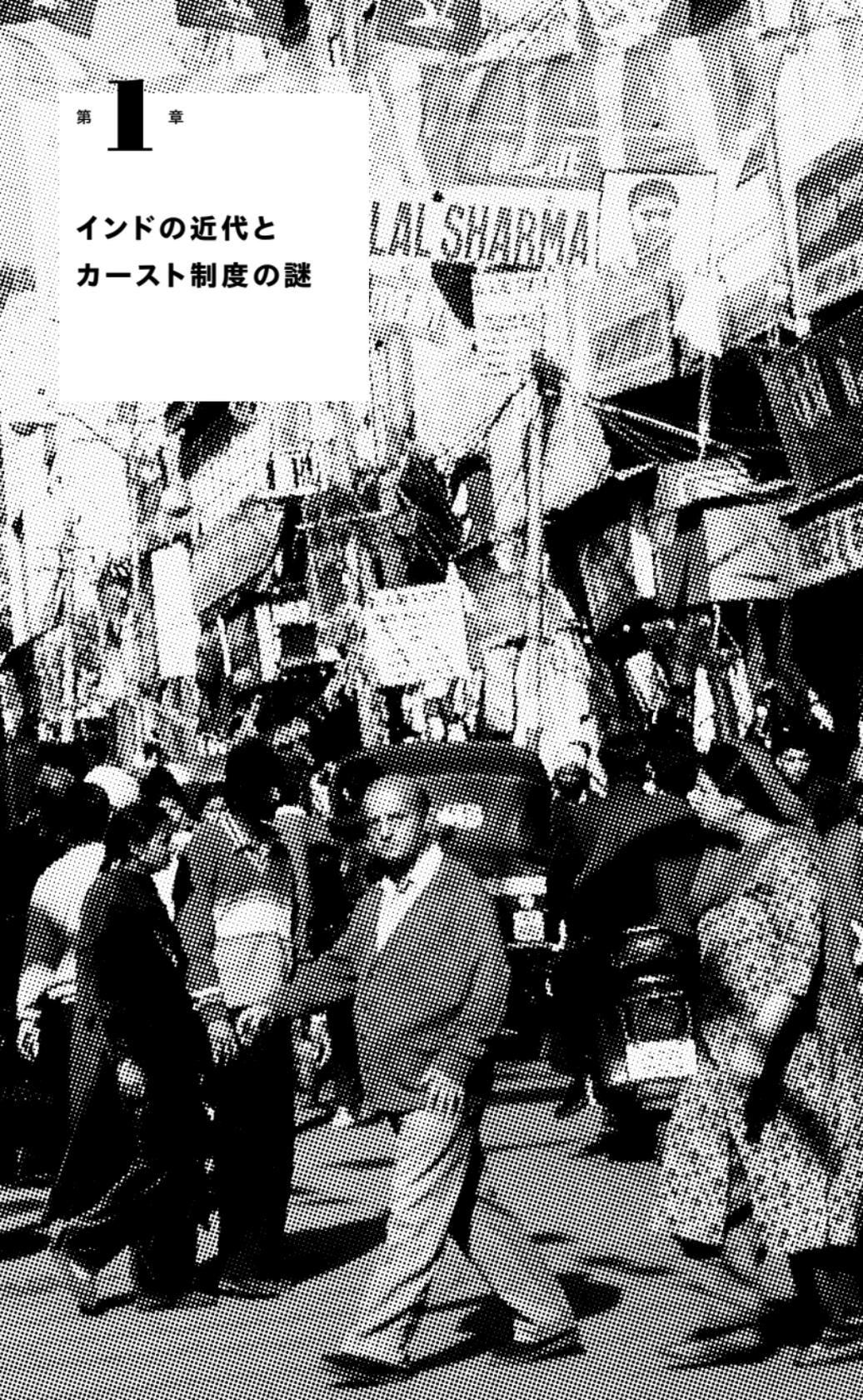
野糞は衛生面で大きな障害となるので、二〇一四年に政権に就いたモデー首相は農村部におけるトイレ設置をさかんに奨励しています。ですが問題は、インド農村の人々のあいだに衛生観念が定着していないことです。これを象徴するようにインドの農村部では、たとえ家にトイレがあっても、多くの人（とくに男性）が「気持ちがいいから」「習慣だから」

などの理由で野糞をするといいます。(なお、インド農村部のトイレは、インド式か、もしくは床の真ん中に穴が開いている式の、インド式を簡素化したものがほとんどです。)

こんな田舎の人たちが都会へやってきて、洋式トイレに出会ったとしたらどうでしょう。その多くが、便座に腰かけるなんて論外、と感じるのではないのでしょうか。だとしたら、彼らがとる行動はやはり、便座を踏みつけて便器の上にあがり、しゃがみこんで用を足すというものでしょう。こうしてインドの洋式トイレの便座は、また汚れて行くのです。

第 **I** 章

インドの近代と
カースト制度の謎



■ ——— なぜ、近世・近代が重要なのか？

序章で垣間見たように、イギリス植民地時代（近代）の歴史は、現代インドの何気ない日常の中にも色濃く影を落としています。そこで本章では、こうしたインド近代に起きた変化が、インド社会にとって、ひいてはその社会を特徴づけているカースト制度にとって、どれほど重要だったかについて考えてみたいと思います。

その手始めとして、以下ではまず、インドの地理・歴史をざっと概観したうえで、近世・近代のインドにおける社会変化がいかに深く、現在まで影響を及ぼしているかについて述べます。

ちよつとかたくるしい話が続きますが、急がば回れで、インドを知るうえで重要な話ですので、お付き合いいただければ幸いです。

インドの地理

ユーラシア大陸の中央南端に位置するインドは、南アジアの中心的な国です。その国土

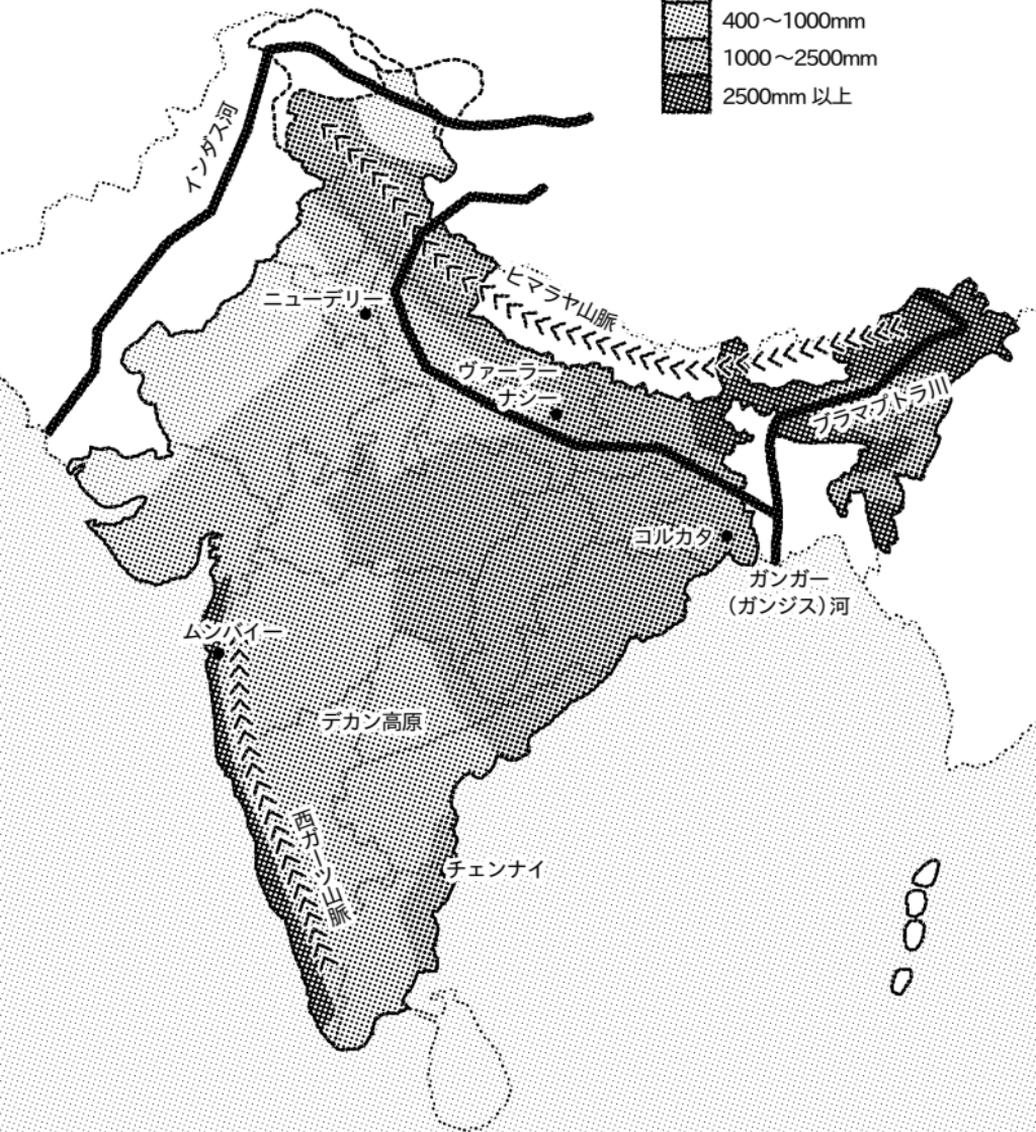
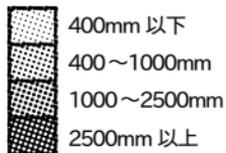
は広大で、日本の約八・七倍（約三二九万平方哩）もあります。

南アジアの地形は大ざっぱに三つの部分に分けることができます。一つめが北の峻厳なヒマラヤ山脈、二つめが南の半島部に逆三角形にひろがるデカン高原とその東西に細くのびる海岸平野、そして三つめがヒマラヤ山脈とデカン高原の間にひろがる広大な平野部です。

こうした広大なインド亜大陸には当然のごとく、河川がいくつも流れています。とくに北のヒマラヤ山脈からは亜大陸を代表する三つの大河が流れ出ています。すなわち、パキスタンを北東から南西へ流れ、アラビア海に出るインダス河、北インドの平野部を北西から南東へ流れ、ベンガル湾に出るガンガー（ガンジス）河、そしてインドのアッサム州からバングラデシュへと流れ、ガンガー河と合流したのちベンガル湾に出るブラマプトラ河です。このほか、西高東低となっているデカン高原ではゴードーヴァリー川やクリシュナー川が西から東へ流れベンガル湾に出ています。

インドで農業をはじめ人々の暮らしに大きな影響を与えているのが、夏季のモンスーン（季節雨）です。デカン高原の西端は隆起し、標高千〜千五百メートルの西ガーツ山脈となっていますが、夏季に南西から吹く湿った風はまずこの西ガーツ山脈とぶつかり、その西側

年間降水量



に南北に細くのびる海岸平野に雨をもたらします。その後半島部を吹き抜けベンガル湾上で向きを変えた風は、東インドの海岸（西ベンガル州とオリッサ州）から入り北インドの平野部を南東から北西へ向かって進み、平野部の東部と中央部に雨をもたらします。年間の降水量が千ミリを超えるこれらの地域（西ガーツ山脈西側の海岸平野、東インド、北インド平野部の東側）には熱帯・亜熱帯の湿潤広葉樹林が広がり、その主要作物は米となっています。北インド平野部の中央部（ウツタル・プラデーシュ州からパンジャーブ州にかけての地域）は小麦の穀倉地帯となっていますが、平野部西部は乾燥し、ラージャスターン州西部にはタール砂漠が広がっています。

インド史のあらまし

このように、地理的に大きな多様性を抱えるインドは、歴史的にも大変な多様性を示してきました。ここでは、大ざっぱなその歴史を駆け足でたどって行くことにしましょう。

南アジアに最初に現れた都市文明はインダス文明で、現在のパキスタンを流れるインダス河沿いに紀元前二三〇〇年頃から前一七〇〇年頃にかけて栄えました。この文明の農業はモンスーン後に起こるインダス河の氾濫に依存していたため、基盤が不安定で、これが

原因で都市の規模や数は伸びなやんだとみられています。

インダス文明の次に現れたのがガンガー河中流域に紀元前六世紀頃現れた文明で、水稲栽培による定着農業を基盤とする都市国家を樹立しました。当初は十六大国が覇を競っていました。やがてマガダ国が強大となり、紀元前四世紀半ばにはガンガー河流域のほぼ全てを支配するに至りました。その後、マガダ国のマウリヤ朝にアショーカ王（在位前二六八頃～前二三二頃）が出て、その統治下、この王朝は（半島南端部を除く）インド亜大陸全域の統一を果たしたといわれています。アショーカ王は仏教を背景としたダルマ（法）に基づく政治を行ったことでも有名です。

アショーカ王の没後マウリヤ朝は衰退に向かい、インド亜大陸ではガンガー河流域以外の地域にも国家が樹立されるようになりました。このうち有名なのは、カニシカ王の時代（二世紀半ば）に中央アジアから中部インドまでを支配したクシャーナ朝と、同じ頃デカン地方を中心に西部・南部インドを支配したサータヴァーハナ朝です。クシャーナ朝の領土にはインド系の他にイラン系、ギリシア系、中央アジア系の諸民族が住んでおり、こうした文化の混交がガンダーラ仏教美術を生み出したことはよく知られています。

その後四世紀に入ると、再びガンガー河中流域にグプタ朝という強力な国家が登場し、

北インド一帯を支配しました（グプタ朝時代には仏教が衰退し、ヒンドゥー教が隆盛しました）。五世紀後半にグプタ朝が衰退すると、北インドは長い群雄割拠の時代に入ります。なお南インドではパッラヴァ朝（三〜九世紀）やチャョーラ朝（九〜十三世紀）が栄え、北インドのヒンドゥー教を吸収して独自の文化を発展させました。

十一世紀に入ると、トルコ系イスラム教徒のガズナ朝とゴール朝がアフガニスタン方面から北インドに進出するようになります。十三世紀初頭には、デリーに拠点を置くトルコ系イスラム教徒の王朝（いわゆる奴隸王朝）が北インド一帯を平定し、群雄割拠の時代に終止符を打ちました。以降十六世紀初頭まで、北インドはデリーを首都とするトルコ系またはアフガン系イスラム教徒の諸王朝によって支配されることとなります。一方、南インドでは十四〜十七世紀、ヒンドゥー教のヴィジャヤナガル王国が栄えました。

十六世紀初頭には、モンゴル系ティムール大帝の血をひくバーブルがデリーにムガル朝を興しました。バーブルの孫アクバルの時代（在位一五五六〜一六〇五）にムガル帝国はピークを迎え、北インド一帯に加えデカン地方の一部をも支配しました。ムガル朝はイスラム教の王朝でしたが、ヒンドゥー教などの他宗教をあえて排斥することはなかったといわれています（とくにアクバルの時代）。

一方、ヨーロッパからは、十六世紀初頭ゴアに進出したポルトガルを皮切りに、十七世紀初頭にはそれぞれ東インド会社（ヨーロッパ各国で本国とアジアのあいだの貿易独占権を与えられた会社）を設立したオランダ、イギリス、フランスなどが相次いでインド洋に進出し、交易に従事しました。当初はオランダの交易活動が群を抜いていましたが、十八世紀半ばには、同時期フランスとの戦いに勝ったイギリスが交易の主導権を握るようになっていました。

インドではアウラングゼーブ（在位一六五八―一七〇七）の没後ムガル朝の権力が衰え、ベンガル地方にも独立の小権力が誕生していましたが、イギリスは一七五七年、プラッシーの戦いでベンガル太守軍を破り、ベンガルの地に初めてその植民政府を開きました。以後、イギリスはインド各地の勢力を次々に打ち破り、十九世紀半ばにはほぼインド全土にその覇権を確立しました。インド統治法の施行（一八三三年）いらい、イギリス東インド会社のインドにおける立法・行政の権限は在カルカタ（現コルカタ）のインド総督とその参事会に与えられていましたが、一八五七年のいわゆるセポイの乱（インド大反乱）をきっかけに、翌年東インド会社が廃止され、以降インドはイギリス本国によって直接支配されることになりました（このとき同時に、ムガル朝が正式に幕を下ろしました）。

十九世紀後半になると、イギリスの植民地支配に対してインド人の民族意識がめざまめ、

一八八五年には中産階級インド人を主体にした政治組織「インド国民会議派」が結成されました。初めは穏健だった国民会議派はやがてインド民族主義の牙城となり、一九一〇年代後半に頭角を現したガンディーのもと、インド独立を求める大衆運動へと発展しました。一九四七年、インドはついにイギリスからの独立を果たします（同時に、インドのイスラム教徒多住地域はパキスタンとして独立）。

独立後のインドは計画経済体制のもと工業化を進め、冷戦時代を通じて東西両陣営から中立的な非同盟外交を展開しました。一九九一年、経済自由化に踏み切ったインドはその後、経済成長を続け、南アジアの中心的大国としてその存在感を増しています。

近世と近代におけるインド社会の変貌

ここまで、長いインドの歴史を、主に王朝の変遷史というかたちでたどって見たわけですが、それではこうした歴史を通じて、インドの社会はどのように変化したのでしょうか。本書ではそうしたインド社会の歴史的变化をすべてたどって行くことはできませんが、とりあえず、近世（ムガル帝国時代）末期から近代（イギリス植民地時代）にかけての、ゆるやかな、しかし不可逆的な社会的変化についてだけは押さえておきたいと思えます。なぜなら、

それはインド社会が過去の姿から現在の姿へとかたちを変えるうえでの節目となるような大きな変化だったからです。

以下では、現在のインド社会のルーツともいえるこの変化について、ざっと概観してみたいと思います。

最初に、かつてのインド社会の大まかな特徴をおさらいしておきましょう。

十八世紀以前のインドでは、北インド平野部を中心に、農村の多くは武装していました。ムガル帝国における徴税の過程は単純ではなく、徴税官の一行に隙があったり地方の権力関係に不均衡があったりすれば、徴税官が武装した村民によって逆に襲撃される場合もありました。また、こうした武装村はムガル帝国軍の兵士の供給源でもありました。言い換えれば、当時の農村の収入源には収穫された作物のほか、兵役からの報酬もあったということです。そして帝国の権力ネットワークはさまざまレベルでの婚姻関係や、ムガル王権を源とする名譽と贈与の応酬によって維持されていました。

こうした社会はまた、非定住的な流動性を多く備えていました。武装村から雇用主のもとへ移動する傭兵集団のほか、行商や遊牧を生業とするさまざまな集団が、やはり武装し

ながら各地を移動していたのです。また、こうした諸集団の境界にはあいまいな面もありました。例えば、遠征する傭兵集団が行商を兼ねておこなったり、宗教的な出家者集団の様相を帯びたりすることもあったと考えられています。この当時も、カースト集団の区別は厳然と存在したはずですが、右に述べたような社会的状況を鑑みると、武士、農民、商人、宗教者などの境界や上下関係には比較的あいまいな側面も残っていたのではないかと想像されます。定住社会では抑圧されがちな小作人にしても、土地に対して労働力が稀少だったこの当時は、集団で移動し、より良い労働条件を求めて各地の地主や小豪族と取引を繰り返していたと思われ、その地位は必ずしも被抑圧者のそれではなかった可能性があります。

そして、こうした旧来のインド社会を特徴づけていたのが、広範な森林の存在です。森はそこに住む部族民たちの生活の場であるだけでなく、不作の年に農民が食糧を求めて入る場所であり、出家者が修行のために入る場所であり、また戦いにおいて形勢不利になった豪族が逃げ込んで敵から身を守る場所でもありました。森林の存在はまさに、かつてのインド社会が持っていた流動性を下支えしていたといえるでしょう。

こうしたインド社会の諸条件は、ムガル帝国時代末期からイギリス植民地時代にかけて徐々に変化して行きました。貨幣経済は十八世紀当時すでにインド社会の津々浦々に広く浸透し、金貸しや貿易商が大きな社会的勢力となっていました。ムガル帝国の弱体化に伴い各地に勃興した小権力や豪族たちは、ムガルのな王権よりも経済力を重視し、より効率的な徴税をめざして農民を土地に縛りつけようとはしました。こうした傾向は土地に排他的所有権を設定したイギリス植民地時代になると加速し、イギリス支配下の社会的安定により農村は武装を解除され、定住を余儀なくされた農民は地主層と被抑圧的な小作農の層に分化して行きました。

森林の伐採は十八世紀にも各地の小権力により、敵の隠れ家を奪う目的で行われていましたが、十九世紀に入るとイギリス植民権力による商業的な伐採がかつてない規模で行われるようになりました。これにより、かつての森の多くは定住農耕のための農地に変貌し、森を追われた部族民の多くが低カーストの小作農グループに組み込まれて行きました。インド社会の定住農耕化はイギリス植民権力によるインダス河やガンガー河流域の新たな灌漑農地化や、綿花や藍（インディゴ）といった商品作物増産の必要性によっても推し進められました。

従来、高カーストの地主層が低カーストの小作農たちを搾取するのがインドの「伝統的な」村社会であると考えられてきましたが、こういった定住農耕的な「伝統社会」がインドに広範に姿を現したのは、じつは近世から近代にかけての時期のことだったので。

こうしてインド社会が大きく変貌するなか、今度はカーストの考え方がイギリス植民地時代に大きく刷新されるのですが、この変化については次節以降で詳しく見ていきます。

2 ——— なぜ、街なかでカースト差別が見あたらないのか？

インドの社会というと、だれもが思い浮かべるのがカースト制度です。インド社会は身分によって階層が厳格に分かれていて、このためひどい差別や貧富の差が生まれる、というのがそのおぼろげなイメージではないでしょうか。

ところが実際にインドを旅してみると、いかにもイメージそのままのカースト差別にはなかなか出くわしません。

インドでは「けがれ」のために下のカーストの者は上のカーストの者と食事の席を共にできない、といつか学校で習った覚えがあるけれど、インドの旅先のレストランや食堂で席がカースト別に分かれているかという点、そんなことはありません。所属カーストのせいで入店を拒否されるインド人も見あたりません。街角で、低いカーストの者が触れたからけがれてしまった、といって憤慨するインド人に出会うこともありません。

旅先でわたしたちの目に飛び込んでくるのは、あきらかにそこに存在する貧富の差だけ

です。召使のようなかたちで働く人々と、彼らを見くだしてこき使う人々のあいだに階層の差があることは察しがつくので、ははあ、これがカースト制度だ、とわたしたちは自分に言いきかせます。そうでもしないと、カースト制度のイメージと旅先の現実のあいだのつじつまが合わないからです。

このように、カースト制度のイメージと旅先のインドの現実がすれ違う背景には、いくつか理由があります。

ひとつは、現在のインドで現実に行われているカースト差別が、とくに都市部では表立って現れてくるような性質のものではないという事情です。詳しくは後述しますが、このことはインドでカースト差別が行われていないということの意味するものではありません。もう一つの理由は、わたしたち日本人が一般的に思い浮かべるカースト制度のイメージが、インドの現実とちよつとズレているという事情です。ここでも影を落としているのが、インドの植民地としての過去です。一言でいえば、植民地インドの社会を外国人の目で眺めたとき見えてきたのが現在の一般的なカースト制度のイメージなのです。この点については、次節で詳しく考えてみたいと思います。

3 — 植民地時代に再定義されたカースト制度

「カースト制度」という言葉が表現しようとするインド社会の現実には、じつは大変複雑です。歴史的に大きな変化があつたうえ、地域によって非常に大きな違いがあるからです。ここではその大まかな歴史を、できるだけわかりやすく解説してみたいと思います。

ヴァルナ||ジャーティ制

まず、一般によく知られているカースト制度の単位「ヴァルナ」と「ジャーティ」を押さえておきましょう。

「ヴァルナ」は大まかに区別された階層を指します。いわゆるバラモン（僧侶）、クシャトリヤ（武士・王侯）、ヴァイシヤ（商人）、シュードラ（農民ほか下層民）およびその下の不可触民という区別がこれにあたります。

「ジャーティ」（ザート）はインド社会で実際に機能しているカースト・コミュニティの単位で、とりあえず、それぞれのヴァルナ階層の中に数多くのジャーティ集団がひしめいて

いるというイメージです。(このほか、通婚のための単位「ゴートラ」などありますが、煩雑になるので、本書では実際に機能しているカースト単位を「ジャーティ」で代表させることにします。)

インドでこの「ヴァルナ・ジャーティ制」のイメージに近い社会がかたちを整えてくるのは中世(十一、十七世紀)のことと言われていますが、その時期は見方によつてさまざまに変わります。

古代のインド社会には聖職者集団や王族などのほか、極端な差別の対象となった集団も存在したことが知られています。こういった古代の諸集団と中世以降の諸ジャーティがどうつながるのかはよくわかっていません。とはいえ、古代の諸聖典にはヴァルナの階層区別についての記述があることから、こうした階層制度が諸聖典の伝統を汲む都市とその周辺の農村で厳格に順守されていたことが想像できます。

中世においても、地域ごとに事情がさまざまだったこともありますが、ヴァルナの階層制が一部の都市とその周辺の社会をこえてどこまで共有されていたかという点、明確ではありません。明らかに一般化して言えばそうなのは、現行ジャーティ諸集団のうちいくつかの起源は中世までたどれるということ、そしてその多くが武士・王侯あるいは聖職者とし

ての生まれの高貴さを自己主張していたということです。

十八世紀以降については豊富な史料からインド各地の社会の詳細が明らかになっていますが、そうした近世インドそれぞれの地域社会に展開した分業・職分制度は、同時期の日本にも士農工商の区別にもとづくかなり厳格な分業・職分制度（そして差別）が存在したことを考えあわせれば、とくに奇異で独特のものだったとは思えません。

日本もカースト社会だった!?

わたしたちはともすると忘れがちですが、日本社会もつい百年ほど前までは、多様な身分や階層の区別で覆われていました。インド社会がかかえる多様性は、じつはそれほど特殊な現象ではないのです。

ここでは比較のために、とくにさまざまな集団の区別がはげしかった戦前の近畿地方の例を、民俗学者宮本常一の記述によって思い起こしてみましよう。

「たとえば和泉平野北部のムラを見ると、一つ一つでムラの格式はみなちがっていたようである。シユク、シユクサガリ、ジョウロク、マイマイなどいろいろの

呼び方の階級がある。それらは決してかつて特殊部落と呼ばれたムラではない。それはそのほかにある。おなじムラの家にも筋のよい家と悪い家がある。決して貧富の差がそれをきめているのではない。そして通婚などおなじような格式のムラ同士でおこなっており、すぐ隣のムラと全然往来しないという例はきわめて多いのである。どうしてこのような差が生じたものであるかを私はまだつきとめていない。」

(宮本常一著作集三〇、一一〇頁)

日本の場合には幸い、こうした多様な社会集団の区別はその後、次第に忘れられて行きました。

ですが、もし日本が当時、欧米列強の植民地だったとしたらどうでしょう。そしてこうした多様な社会集団の区別が、植民政府の手で国勢調査のさい詳細に記録されることによって、日本社会の中に永く残っていったとしたら？

イギリス植民地時代のインドで起きたのは、まさにこうしたことだったのです。

植民地時代に再定義されたカースト制度

大ざっぱに言ってしまうえば、植民地時代のインドには次のような歴史的過程があったと思われまます。

広大なインド亜大陸を統治するにあたり、イギリス政府（一八五八年までは東インド会社）にはインド社会の性格を理解する必要がありました。そこで十八世紀末から十九世紀初頭にかけて、イギリスのインド統治関係者や西欧の東洋学者らは、インドの「歴史的本質」を古代サンスクリット語諸聖典に求めました。この動きの背景には、自文化のルーツを古代ギリシアなどの「古典」に求めるルネッサンス以来の西欧の文化志向や、同時代のインドを「東洋的専制」のもと発展を止めた「中世的」社会として軽視する姿勢がありました。

そんなわけでイギリスがインドに設置した裁判所では、民法法について、ヒンドゥー教徒に関しては古代サンスクリット語諸聖典に、イスラム教徒に関してはコーラン他にその法源を求めることになりました。そしてこのときはじめて、古代サンスクリット語聖典にあるバラモン、クシャトリア、ヴァイシヤ、シュードラというカテゴリーがインド（ヒンドゥー）社会全体に適用され、インド社会がこれら四ヴァルナ（および不可触民）によって構成された「カースト社会」であるという観念が成立したのです。（ちなみに「カースト」という言葉

はポルトガル語 *casta*〔血統、種族の意〕にその起源があります。この言葉は十六世紀にインドへ進出したポルトガル人によって、現地の社会単位を形容するのに用いられました。〕

さらに都合の良いことに、イギリスが入り込む時期のインドには、ちょうどこのヴァルナの考え方に当てはまるような社会が出現していました。どういふことかというところ、武士・王侯集団と聖職者集団にくわえて、(本章Iで概観したように)当時のインド社会には経済活動の進展により一群の商人集団が、そして農民の分化により被支配者としての定住農耕集団が一定の規模であらたに出現していて、こうした当時のインド社会全体の見取り図として古代のヴァルナ区分がちょうどうまくフィットしたということです。ですがこのことは同時に、ヴァルナ制度が古代からえんえんと変わることなくインドで存続したという錯覚をも生み出しました。

差別を助長したアーリヤ人種論

そして西欧東洋学の影響はこれにとどまりませんでした。

十九世紀の西欧東洋学における古代サンスクリット語文献研究の一大結論は、サンスクリット語はヨーロッパ諸語と起源を同一にしており、言語学的に「インド＝ヨーロッパ語

族」という一つの共通カテゴリーを想定することが可能だということでした。おりから西欧ではダーウインの進化論が議論を巻き起こしていましたが、通俗化した進化論はやがてこの東洋学の結論と結びつき、さらに東洋学者らが古代インドの聖典『リグ・ヴェーダ』からとり出した言葉「アーリヤ」とも結びつき、結果的にインド＝ヨーロッパ諸民族の共通の起源としての「アーリヤ優性人種」という考え方を生み出しました。

この考え方はインド史の文脈では、古代インドにアーリヤ優性人種が北方から侵入し、在来諸民族を駆逐してインド亜大陸の支配者になったという歴史観を生み出しました。またこれが四ヴァルナ理論に応用されると、上位三ヴァルナ（バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシヤ）はアーリヤ優性人種の子孫、シュードラと不可触民は「土着」民族の子孫であるという人種差別の観念を生み出し、いわゆるカースト差別が激化する大きな一因をつくりました。

アーリヤ優性人種論はヨーロッパではナチスドイツによるユダヤ人差別を助長しましたが、インドではカースト差別を助長したのです。

ちなみにインド古代史の権威ロミラ・ターパルによれば、そもそも古代インドには人種の観念がなかったはずなので、『リグ・ヴェーダ』中の「アーリヤ」が人種を指す語だったとは考えられません。古代のインド亜大陸では大きな人口移動や異文化接触があったに違

いないのですが、その詳細にはまだ不明な点の方が多く、これを「人種」「民族」といった近現代の観念によって説明するという行為には、古代の事実を物語る以上に近現代の偏見を助長する作用があったわけです。

ジャーティ意識の刷新

こうした植民地的事情によって「カースト制度」が性格づけられて行った十九世紀はまた、ナシヨナリズムの時代でもありました。

単純に考えても、人が自らを特定のカースト集団（ジャーティ）の一員とみなすためには、インド社会に各ジャーティの特徴の定義がある程度ひろまっています、かつそうして定義づけられた各ジャーティが村や町のレベルを超えて広範に集団として機能していなくてはなりません。こうした各ジャーティの性格づけ・集団形成は植民地化以前の時代から長い年月にわたって行われたわけですが、それが現行に近い、よりはっきりした形をとるようになったのはやはり植民地時代（十九世紀後半）のことだったと思われまます。

この時期、イギリス植民政府は国勢調査や地誌作成などの過程で各ジャーティの細かい定義づけを行い、またインド人の側でもこうした定義を自ら血肉化し、より広い地域で活

動するそれぞれのカースト団体を立ちあげて行きました。この当時は新聞など印刷物の流通、また交通・通信の発達によつて、全世界的に「社会」「ネイション」への想像力が生成／刷新され各地でナショナルリズムが高揚したわけですが、インドのジャーティ「コミュニティー」意識の形成／刷新も、時代のこうした流れと軌を一にしていたのです。

同時にこれは、それぞれのジャーティが似たような地位のそれと比較して自らがより優れていることを主張し、互いに競い合つてさまざまな差別意識を強めていった時代でした。こうした意識は植民政府の政策、たとえば武闘に適すると政府がみなした特定カースト（ジャーティ）の出身者のみに帝国軍への雇用を認めるといった政策によつてさらにおおられ、深まりました。植民政府のもと土地改革が進み、土地を「所有」という考え方が定着すると、それまで単に職分の違いだった諸集団の区別が、土地所有の大小によつて上下の身分差別に転化した側面もありました。

そして、こうした近過去発生の差別に由来するインド人同士の争いや怨恨が数世代を経ると、その歴史的背景は忘れられ、この近代的カースト差別は彼らの間で、あたかも有史以前からの慣行であるかのように受け取られるようになったのでした。

学問が定義した「伝統的」カースト制度

現行のいわゆるカースト制度の考え方と社会的機能は大ざっぱに以上のような歴史的過程を経て形成されたと考えられますが、インド社会を外側からはかる物差しとしてのカースト制度の観念はこの後、もう少しひとり歩きを続けることになります。

文化人類学という学問は基本的に、欧米列強が植民地の「原始的」で「伝統的」な社会を研究する学問として始まったわけですが、この文化人類学においてインドのカースト制度は、二十世紀に入ってからも、人類の「伝統的」で「中世的」な社会制度の典型例として扱われ続けました。そこでは概して、右に述べたような近代史的過程は考慮されず、カースト制度はほとんど超歴史的にインド社会を規定する「伝統」であるとされ、またこうした見方は「悠久のインド」といったイメージを増幅しながら世界にひろまって行きました。

現在わたしたち日本人が思い浮かべるカースト制度の一般的イメージは、こうした二十世紀文化人類学による「客観的」で「学術的」な偏見の影響をかなり受けています。だから、わたしたちがインドを旅するとき、頭の中にあるカースト制度のイメージと実際に目にするインド社会の現実がややズレていても、無理はないのです。

4 ——— カースト差別は、どんなかたちで続いているのか？

では、紆余曲折の歴史を通じて形成／刷新されたカースト制度やいわゆるカースト差別は、なぜ今に至るまでなくならずに存続しているのでしょうか。

その答えを一言でいえば、それはカースト差別が時代にあわせて変貌し続けてきたためです。

では、それは現在、どのようなかたちで存続しているのでしょうか。

すでに触れたように、現在インドの都市部では、少なくとも公共の場ではカーストの区別は目につきにくくなっています。

地方によつては、とくに農村部で今も激しいカースト差別（とくに不可触民差別）が残っているわけですが、私が住んでいた北インド地方都市の日常生活レベルでは、あからさまにカースト差別らしき言動や挙動に出くわすことはほとんどありませんでした。

ですが表面に現れてこないからといって、カースト差別がなくなったというわけではありません。

現代インド人の生活でカーストの影響が顕著にあらわれるのは、主に就学、結婚、就職、選挙の局面においてです。（このうち結婚については第四章で述べるため、ここでは触れません。）

以下では、これらの各局面において、カースト制度が具体的にどう機能しているのか見て行きましょう。

留保制度

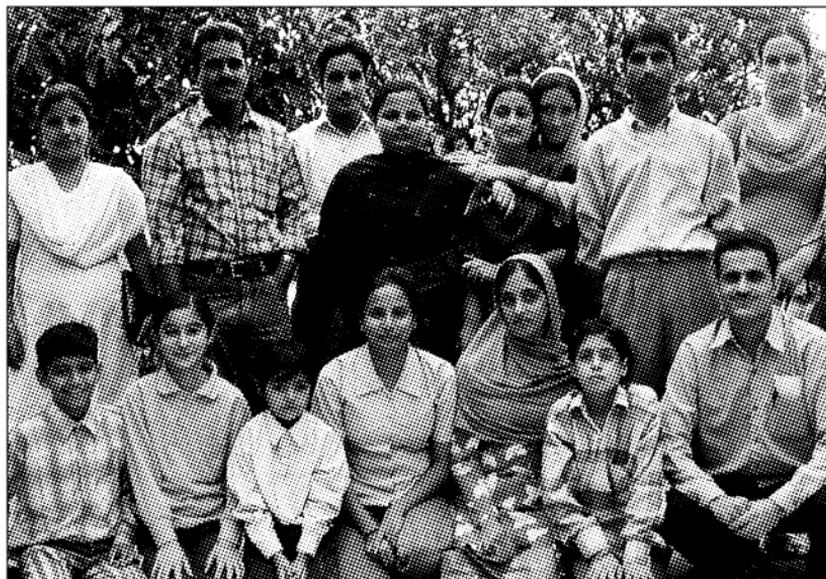
インドではとくに一九四七年の独立後、社会的な弱者集団（不可触民や山岳・森林部族民など）に対する留保制度が大々的に始まりました。これは各種の学校や議会などを対象に、弱者集団出身者のために入学者数や議員数に一定の留保枠を設け、優先的に入学・当選させる制度です。（ただし制度の詳細は州や自治体ごとにまちまちで、どの集団までを留保の対象に含めるかはインド政治の大きな争点であり続けています。）

ですが格差是正のためのこうした特定集団優遇措置は、わが国の同和政策の歴史を考えてもわかるように、その必要性に疑いの余地がない反面、社会の中に一定の感情の齟齬を生みだします。

例えばインドでは大学（カレッジ）進学は基本的に高校三年の最終試験の成績によって決

まりますが、留保枠を使って入学した生徒に対しては、やはりどうしても「あいつは大して出来ないくせに、ああいう集団の出身だから入学できた」といった意識・感情が出てきてしまいます。日本の大学生の間でも帰国子女枠を使って入学した生徒への一定の感情的距離というものが存在しがちだと思いますが、それが「生まれ」を基準にした留保枠によるものだと、その感情的距離はいやおうなく拡がることになります。私が勉強していたインドの地方大学でも、表立った差別こそありませんでしたが、やはりそういう生徒を「区別」して見る視線はことあるごとに感じられました。

またインドの留保制度の問題点として、同じ弱者集団に属する人たちのあいだでも、この制度を利用して出世し、上流社会にどんどんネットワークを張ってゆく一握りの人々と、そこからとり残される大多数の人々のあいだに大きな



大学生のピクニック。カーストや宗教は大学では比較的気にされない。(ジャンムー)

格差が生まれがちな点がよく挙げられます。

ちなみに、ひとくちに不可触民や部族民といっても、そういった集団の中には昔からの地方の名家や有力者が含まれている場合もあり、こうした人々は留保制度が導入される以前からその地方の上流社会や高カーストの人々と深いつながりを持っているのが普通です。複雑な由来を持つインドのカースト（ジャーティ）各集団の現実には、一元的なカースト制度の観念ではなかなか反映しきれるものではありません。

なおインド全人口における不可触民 (Scheduled Castes) の割合は、二〇一一年の国勢調査によれば一六・六%、部族民 (Scheduled Tribes) の割合は八・六%であり、両者の割合は年々微増する傾向にあります。

就職におけるカーストの影響

就職にかんしては、また別の事情が存在します。

インドでは、民間企業は基本的に同族経営です。このため、もともと企業活動に足場のないカーストの出身者が民間企業に就職したり、起業して市場に参入したりするのは容易ではありません。そして大企業をはじめとする経済活動の主要部分は歴史的に支配階級（ヴ

アイシャ階層の名家など高カースト出身者が牛耳ってきたわけなので、コネのない低カースト出身者にとって状況は不利です。

インドでは婚姻関係はふつうカースト集団内で結ばれるので、それぞれの企業や会社のカースト性はなかなか崩れません。もちろん市場は自由競争の場なので、たとえば不可触民起業家の成功例なども一部には存在するわけですが、こうしたケースは全体から見ればまだ稀です。

だから一般に不可触民の若者たちは、将来の夢を民間企業ではなく、差別の少ない公共部門、すなわち政府諸機関の職に託すことが多いといわれます。政府の清掃・衛生局の仕事が事実上、清掃を生業としてきた特定の不可触民ジャーティ集団によって担われている事情はよく知られています。こうした部局にかぎらず、不可触民にとっては公共部門の職場のほうが、なにかと肩身の狭い民間企業より落ち着けるのです。

近年ではインドの一部大企業がCSR（企業社会責任）の一環として不可触民を雇用する動きもあるようですが、こうしたプログラムの存在自体、民間企業活動における低カースト出身者の一般的苦境を物語っています。

インド政治におけるカースト

インドでは、政治的な理由からカースト差別が激化する場合があります。

独立後のインドでは、とくに地方農村部における権力関係に大きな変動がありました。それぞれの地方の地主層、つまり高カースト出身のかつての地方支配階級が都市部へ移住し官僚集団に姿を変える一方、これに代わって、人数ではだれにも負けない中・小農諸カースト（いわゆるシュードラ階層）が地方農村部の新たな支配集団として政治の表舞台におどり出たのです。そして一九六〇年代に端を発するこうした中・小農諸集団の政界進出過程は、高カースト中心の国民会議派による政治支配の崩壊過程と重なっていました。

他方、不可触民たちは弱者優遇政策の提唱・実践者である国民会議派を支持していましたが、これが一九七〇年代の時点で、反国民会議派のジャナタ党のもとに結集した中・小農たちの反感を買いました。七七年、ジャナタ党がインド中央の与党になると、権力の後ろ盾を得た中・小農カーストの人々はここぞとばかりに各地で不可触民を標的に暴動を起こしました。これ以降現在まで、不可触民に対する主な暴動・虐殺事件の加害者はほとんどこの中・小農カーストの人々であるといわれています。

こうした変化を経て、カーストをめぐるインド政界の力学はその後もその均衡を変えて

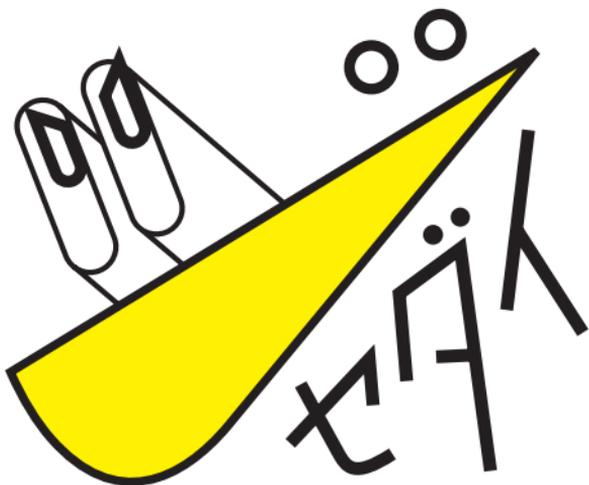
行きました。

インド最大の人口を誇るインド北部のウツタル・プラデーシュ州はよくインド政治の中核といわれますが、二〇〇七年のこの州の議会選挙では、ちよつと奇妙なカースト構成による選挙活動が展開されました。この州であまりに強大・横暴になった中・小農勢力をけん制するために、旧支配階級のブラフマン（バラモン）勢力が不可触民の政党BSPの支持に回つたのです。その結果、この選挙ではBSPが大勝し、党首のマヤワティという不可触民の女性が州首相に就任しました。BSPが州議会で過半数を獲得するという現象は、以前では考えられなかったことであり、カーストをめぐる現実も日々刻々変化し続けていることを感じさせる出来事でした。

とはいえ、インド社会の大勢はまだまだ高カースト中心で、不可触民をはじめとする低カーストの人々の苦境は基本的に今日も続いています。

なお、本書では被差別カーストを指す際、日本で一般化している「不可触民」の語を用いています。この語、つまり「アンタッチャブル」は、現代のインドでは差別的であるとしてあまり使用されません。現在は、一九七〇年代に被差別者ら自身によって使われ始めた「ダリト」（＝粉砕された者、虐げられた者）の語が一般的になっています。

君は、



何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!